

日本ハンドベル連盟創立40周年アジアフェスティバルが、8月18日～20日にかけて仙台国際センターを会場に開催されました。最終日には7か国・地域から集った600名ものハンドベル・リンガーによるマス・リングングに聴き入ることができました。まさに圧巻としか言いようのない演奏でした。

喜ばしいことに昨年度からキリスト教センター直属の学生団体として大学ハンドベル・クワイアが発足したのです。すでに中高では40名ものメンバーからなる立派なハンドベル・クワイアが活動を展開していますが、大学にはありませんでした。昨年は4名しかメンバーがおりませんでした。今年は9名となり、後期からは、ふさわしい指導者も与えられ、本格的に活動が始まろうとしています。

ハンドベルの響きには心を癒し、慰め、励ます力があります。息の合ったハンドベルの演奏は、人が共に生きる喜びを、その希望を体現します。演奏する人はもちろんのこと、聴き入る人も、いつのまにかほっこりと心をあたためられ、優しい気持ちとなり、明日へと踏み出す力、希望が与えられるのです。

つくづくハンドベルという楽器は「なんて不便で、なんて不器用で、なんて愚直な楽器だろう」と思うのです。なぜなら、ピアノやバイオリンやフルートなどと異なり、一つのベルが、たった一つの音階しか奏でることができないからです。小さなベルであれば、一人でいっぺんに四つのベルを鳴らすこともできますが、たいていは一つ、または二つのベルを持って演奏することになります。ですから、ハンドベルは絶対に独奏楽器にはなりえません。これほど不便で、不器用で、愚直な楽器もないと思うのです。

でも、その不便さ、不器用さ、愚直さがハンドベルの魅力であり、素晴らしさであり、豊かさであるに違いないのです。一人では楽しめないということは、演奏するためには必ず他の人の協力、助けが必要だということです。いがみあったり、反発しあったり、仲違いしているようであれば、絶対に美しいハーモニーが生まれてこない楽器という点では、ハンドベルが一番と言えるでしょう。互いを尊重し、敬愛しつつ、思いと心を一つにしなければ演奏できない楽器、それがハンドベルに違いないのです。

わたしが好きな言葉にコミック『ワンピース』の主人公ルフィが語る「おれは助けてもらわねえと生きていけねえ自信がある!!」という言葉があります。意表をつく言葉です。しかし、まさしくハンドベルを演奏するということは、常にそのことを確認させられるということではないでしょうか。それはまた、福音書のなかでイエス・キリストが語る「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛しあいなさい」ということを体感させられる楽器とも言えるでしょう。

世界に、様々な憎しみがあり、紛争があり、対立があります。もし日本に、アジアに、世界に、ハンドベル・リンガーが一人、また一人と増えていったら、わがままな思いや、ひとりよがりの思いが次第に薄れていき、和解と一致が広まるのではないのでしょうか。

「ひとりの手」という歌があります。ご存知の方も多いと思いますが「一つの小さな手、何もできないけど、それでもみんなの手と手をあわせれば何かできる、何かできる」という歌です。この歌はハンドベル・リンガーのための歌でもあると思います。宮城学院の、東北の、日本の、アジアの、世界各地の小さな手と手があわさって、ますますハンドベルの響きがゆたかに奏でられ、紛争と対立の時代に和解と一致を願う思いが満たされていくことを心から願わずにはられません。